

日本代表選手が過去最多のメダルを手にした韓国・平昌冬季五輪。一九九八年の長野冬季五輪を超える選手たちの活躍に、国内は盛り上がり、大きな感動を呼んだ。道産子も、女子スピードスケートの高木菜那、美帆の姉妹、女子カーリングのLS北見など、九人がメダルを獲得。北海道は選手たちに道民栄誉賞を贈る方針だ。

次回二〇二二年は中国・北京。札幌市はその次の二〇二六年に名乗りを上げている。道産子のメダルラッシュに、招致活動に弾みがついたように見える。ただ、五輪は今、曲がり角に来ている。二度目の札幌五輪が、本当に札幌市民、道民を幸せにするのだろうか。

◇ ◇

一九七二年の札幌冬季五輪。スキージャンプ七〇級で「日の丸飛行隊」の三人が金銀銅のメダルを独占するなど、その活躍は今も語り草になっている。一方で、五輪を機に、札幌の街並みは大きく変貌した。

地下鉄南北線と地下街の開業、札幌自動車道の開通、市役所新庁舎の建設、真駒内地区の整備など、建設ラッシュが続いた。当時建てられた施設は今の札幌市の礎を築いた。当時の人口は約一〇〇万人。「ザッポロ」の名前は世界に拡散し、国際都市へと一步を踏み出した。雪まつりには毎年多くの観光客が押し寄せる。現在の人口は約一九〇万人とほぼ倍増した。五輪が札幌の成長を

五輪の是非は住民投票で

より加速させたとと言える。

あれから四十六年が経った。当時建てられた施設は老朽化が進む。今回、新たに誘致に手を挙げた背景には、五輪を機に、施設を建て直したいという思惑もある。経済界からは「再び五輪が開催されれば、街が変わる」との期待の声が漏れる。市の試算では経済波及効果を全国で一兆四九七億円、道内で七七三七億円、札幌市内で五四〇四億円と試算している。

だが、開催費用が膨らみ続ける五輪は、その効果に疑問が starting している。二二年の冬季大会では、オスロヤストックホルムが巨額の費用負担に二の足を踏んで撤退し、北京とアルマトイの二都市だけが名乗りを上げた。二四年の夏季大会も招致活動から退く都市が相次ぎ、パリとロサンゼルスも二都市しか残らなかった。苦肉の策として二八年も含めて開催地を二大会同時に決めた。開催地が決まらないことを避けたとみられている。

札幌五輪の開催費用は四五六五億円、市の負担は一一〇〇億円と試算されているが、三〇〇〇億円の収入不足が見込まれている。さらに、札幌に施設のないアルペンスキーカーコースは二セコ、スピードスケートは帯広での開催を目指す、スケート場は大幅な改修工事が必要。ソリ競技も札幌五輪で使い、現在は閉鎖中のコースを改修する計画だが、長野か平昌での開催も浮上し

ている。ただ、長野のソリコースは維持費がかさみ、今後は競技としては使用しない方向だ。二〇年の東京五輪のように開催が決まった後で、費用が膨らみ続けるという危険性は消えない。

◇ ◇

札幌五輪の誘致活動は、情報収集を行う第一段階「対話ステージ」から、具体的に招致活動に入る第二段階「立候補ステージ」に進むか否かが今年秋までには決まる予定だ。札幌冬季五輪招致を表明した二〇一四年一月、当時の上田文雄市長は「都市のリニューアルを進める」と強調した。札幌市の人口は今後、減少に転じると予測されている。五輪を開催するのなら、少子・高齢化社会を見据えた将来の街づくりをどうするか議論が必須だ。巨額の費用が投じただけの、効果が本当に生まれるのか。しっかりと試算とともに、市民、道民の理解が欠かせない。

オーストリア・インスブルックでは、高額な開催費に批判が強く、住民投票では反対が多数派を占め、五輪招致レースから撤退の方向だ。札幌市は二〇一四年に、五輪招致の是非について一万人の市民アンケートを実施した。その結果、六割以上が賛成の意向を示したが、札幌の将来の街づくりをどうするか議論は冷え込んだままだ。札幌でも、住民投票のような市民に意思を問う仕掛けが必要ではないか。 〆洋▽